佐土原聡教授

4学科で都市を考えるために

阿彦：今日は建築学科生というよりも都市科学部１期生としてお話をしたいと思います。よろしくお願いします。

阿彦：まず最初に都市科学部の創立について伺いたいです。今までの理工学部から都市科学部に変わってどのように変わったかをお聞きしたいです。

佐土原：そうですね。これまでは理工学部の建築学科だったんですよね。ですけど都市科学という、都市に焦点を置いて建築に取り組むっていうこと、都市科学部の中での建築っていう位置づけのために都市科学部を作ったということです。都市の中の建築がどういうものと関係づけられながら存在するか。まず都市社会共生学科が対象とする " 人 " がいる。人が生活をしたりいろんな活動をしたりする器としての建築。だから人の生活をデザインするということになるんですけど。それで建築がいくつも集まって地域や都市ができると、単にひとつの建築だけ考えているわけではなくて、建築と他の建築との関係とか、外とのつながりとか、あるいは都市を支えるインフラ・土木、都市基盤の分野と建築との関係とかっていうのを考えていく必要があると捉えてもらえるといいなと。さらに環境リスク共生学科ってすごく広い分野を扱うわけですけど、流域とか地球全体とかっていう自然環境の一部として都市が存在していることを考えながら、都市のたくさんの人が一緒に住んでいくために人が作っている社会環境の中でも都市があるっていうことを考える。そういう中に建築が存在するということをこれから建築や都市づくりに関わる人たちには学んでいって欲しい。
それで色々考えを整理して設置申請書というのを文科省に出すんです。特に都市で文化系っていうと社会学があるんですけど、社会学の分野もしっかり教えられるようにしてくださいとか。建築っていうのはすごくはっきりしているんですね。人が暮らす空間をどうつくるかということで。もちろん構造的な問題もそうだし環境的な問題もそうだし都市計画の中での位置付けもそうだけど、それをデザインするということで建築はすごくはっきりしているので、都市科学部の中で建築を学ぶっていうのはすごく理解しやすかったと思うんですけど、文化系はどういう風な人たちを主に育てるのか、いろいろ文科省とやり取りをしながら最終的にスタートできるまでいろいろ準備をしていたっていうのはありますね。そういう思いでやってきたんですけど、果たして今までの理工学部にあった建築より、都市科学部の中にある建築が " 都市 " っていうことを意識されている面があるのかどうかっていうことも皆さんに聞いてみたいなと思っていました。

都市科学ABC

佐土原：そのための授業として１年生の都市科学 ABC というのがあって、それも実際に教科書があるわけではないので、なんとかこういう人たちに毎回授業やってもらったりして、その中でグローバル・ローカルっていうのが少しでも理解できるかなとか、皆さんのレポートも見たりしながらこれでもいいのかっていうことを担当の人たちと結構自問自答しながらやったっていう面もあります。ともかく人数が 250 人とかっていう規模で、きめ細かい授業がなかなかできなくて、一方的に喋ってレポート書いてもらって少しレポートのレビューなんかして終わりになっちゃうっていう、そういうところがありました。これからそれも少し改善していこうということにはなっているんですけど。他の学科の科目を興味がある人が結構取れるようなカリキュラムになっていて、単位に入る形で選ぶこともできる。ただ建築の中の必要な科目も一定程度あるからどのくらい自由度があったのかなっていう事をお聞きしたい。一応 4 年間やってみて皆さん１期生となるわけですけど、都市科学 ABC ってどうでした？

阿彦：都市科学 ABC は１年生の最初から内容が割と難しいのが多くてあまり理解が追いつかなかったのと、他学科との交流っていう意味ではなかなか難しかったのかなっていうふうに思っています。みんなでも少し話していたんですけど、ある程度自分の専門の分野を理解を深めた上で他学科とも交流できるような授業があったほうが、もっと専門的に深い議論ができたりとか、各学科としてだけではなくて都市科学部全体として何か新しいことができるじゃないですけど、いろいろ広がるかなっていうふうには思いました。

佐土原：高年次でそういう、３年生ぐらいになってもし一緒に演習みたいにやったりできるといいのかなとか、それもちょっと議論したりはしましたね。他の学科の人となかなか交流する機会は持ちにくいですかね。

寺内：やっぱり建築学科に入って興味がある分野は建築がメインだったりするので、他の分野の内容が難しかったり、自分の理解が追いついてないところがあったりしたので、先生によって話がわからなかったりとか色々、自分の中でレポート書いたりとかして本当にわかって書いてるのかなっていうのは結構あって。また今同じ授業を受けたとしたら多分考え方とか見え方とかも変わってると思うので、学年が上がった後で似たような形で受けてみたいというふうには思いました。

佐土原：やっぱり１年入っていきなり面食らったりしてた感じですかね。
結構専門的な話をする先生もいて、配慮してなるべくビジュアルにやってくれる先生もいるんだけど、自分の世界に入り込んでしまうような先生もいるんですよね確かに。だからあまりにも情報量も多いんだろうから、それが消化しきれないうちにどんどん入っていくから分からなくなっちゃう、そういうところがあるかもしれないですよね。
「リスク共生」は野口先生が繰り返し説明してましたけどどうでしたか？（笑）

正林：本当に正直に言いますと、都市科学 A と C はまあ内容は難しいながらも自分なりに消化したつもりだったんですけど、リスク共生の時は本当に分からないことしかなかったっていうのが正直な感想です。

佐土原：僕が聞いてても、すごく抽象的な話だからどこまでわかるかなっていうのは思ってて、繰り返しいろんな表現で同じことを説明しているんですよね。今のこういうコロナのような状況がこうだからこうっていうふうに、これとこれで共生とか、両立しないとか色々具体例を取り上げた話はわかりやすかったと思いますけど。イノベーションはどうでした？

八木橋：確かに環境リスクに比べれば（わかりやすい）っていう感じはありましたけど、都市科学を学ぶっていうことに対して、１年生から考えきれてないというか。そこの価値みたいなことにあまり気付けていなかったですね。

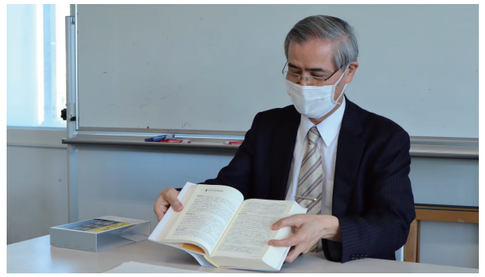
佐土原：そこの価値を入った時にどうやって理解してもらうかって大事ですよね。

八木橋：今自分が 4 年終わって卒業するってなった時に改めて考えてみると、自分が思う大学で学ぶことに対して、年を重ねるごとに専門化していくってことと、一般教養みたいに広く学べるっていうことが二つあると思っていて、都市科学 ABC みたいなのはどちらかというと後者のような印象があるんですけど、一般教養とは違ってもうちょっと踏み込める領域ではあると思うので、継続的にずっとやるべきような内容だったような気がして。結局専門化していくっていうだけになっていたような気がするので、そこの学びのスタイルみたいなものが、都市科学部っていう新しい学部で体現されたらおもしろいなっていう風に思います。

佐土原：今言った価値っていうか、１年生で入った時の動機付け、都市科学っていうことで学ぶことの意味をもっと明確にしないと、きっと専門が忙しくなってきたらもう専門やらないとっていう感じになってしまいますよね。どうですか都市科学、どんな風に受け取ってました？

周 : 都市科学 ABC はレポートが多く苦労しました。けれどその中でも都市科学 B は 印象に残っていて 、抽象的な内容も多かったけれど、大学院試験の時に小論文があり 対策をしている中で、横国のリスク共生社会創造センターのホームページにあった野口先生のエッセイを読んでいて、一年生の時に学んでいたことがこのコロナの情勢によって結びつきました。四年前に学んだ知識が実体験となり再認識しました。

佐土原：そういうように活かされていると凄く良いと思う。聞いた時は十分に理解していないけれど、何度も聞かされることにより結構頭に刷り込まれていたり、そのことがパッとある事象に触れることにより、このことだったのかと学べるということは、都市科学 ABC にとっては良い形だなあと思います。１年生の頃はコロナの状況ではなかったけれど、今改めてリスク共生の視点から見るといろいろなものが見えてくることもありますよね。



都市科学事典

佐土原：都市科学というものが実態としてどういうものなのかはまだ 確立されていないというところが本当のところで、今回都市科学事典を作ったのは、都市科学がどういう領域のものを扱うかを明確にするために、領域を 10 ぐらいに分けてその中で重要だと思った項目を 50 ぐらいずつそれぞれの専門の方に書いてもらっています。都市科学そのものの役割は明快なのだけれど、都市科学の学問領域は複雑で、今都市で起こっている問題を解決するために学んでいる知識を生かすことができるような学問領域・分野だと考えています。けれど、それは具体的にどういう領域のどういう範囲のものを扱って、それぞれどういう形で活かすかというときに、文系の人と理系の人と色々な知識を合わせて一緒になってやっていくのかとかそういうことの具体例をこれから作らなければならない中で、その最初の基盤のようなものをつくるという作業を、みなさんが一年生として入学してきたときから四年間やってきました。都市科学事典をつくるきっかけとなったのは、都市社会共生学科の社会学の吉原先生が以前作ったコミュニティ事典というもので、コミュニティという言葉もすごく多様でなかなか範囲が決まらないから、色々な方にコミュニティについて語っていただこうということでまとめられました。その経験を活かしながら、まず都市科学という知識をしっかりと集めてみましょうというものが都市科学事典になります。この本は難解なことが書いてある部分も多いですが、一項目を見開きでだいたい 2500 文字くらいで説明してあって、とても 2500 文字では語れないようなことをコンパクトにグッと入れているから、恐らく、読む人はそのページだけでなくそのページ内に出ている言葉もいろいろ調べながら理解していかないと、簡単には理解できないと思います。僕は、「環境と生活」を中心にまとめましたが、歴史から始まり、空間・食政治・経済 ....、建築は「建築とデザイン」と言うところで一つ領域を設けて、建築の人たちで書いたんです。それから「環境と生活」、「都市と思想」ということで ...。
ずっと項目を整理しながら、それを色々な人にお願いして、僕が一応まとめ役なので全部読んだんですけど、これを読むのに何ヶ月かかかって、しかも、分からないことがたくさんあるので、項目によって難しいものであったり比較的スッと入ってくるものであったりしたのですが、本やネットで調べたりしながらも一項目を理解するのに、一時間ぐらいずっとうなりながら読んだりする事もありました。この事を経て思ったのは、文化系と理科系が一緒になって都市を作っていくと考えた時に、文理融合って本当に難しいしなかなかうまくいかないんだけれど、少なくとも僕は理系の人間で、文系の人がどういう視点を持っているのか、はじめの頃は全くといっていいほどわからなかったけれど、段々と大きく文系と理系は異なるということが分かってきて、そのうち、自分の中で文系の人の視点に立つとこう考えそうだということが少し分かってきた。それがきっと文理融合に繋がり、相手の立場にたって考えたり説明したりすることができるのではないかと感じました。全部読んで思ったのは、そういうところですね。文系と理系ってこんなに違うんだというところ。

文系・理系の視点の違い

佐土原：例えば、第二章に空間と場所があるんですけど、「空間」という捉え方はすごく理系的な捉え方で客観的な見方なんですけれども、「場所」というのはその場所に立ってそこはどういうことなのかという文系の人は自分の視点で色々なものを語っているんですよね。僕ら (理系) は、一般化しようとして一生懸命客観化しようとするというところが違う。だから、色々なことを言ってもすれ違うことがあり、それをすごく感じました。空間についても、文系の社会学の先生の言葉の中に、「生きられた空間」という言葉が何度も出てきて、空間を自分がどう捉えてどう見てきたのかという生きられた空間表現と理系的な遠近法的空間という言葉もあって、これは透視図なようなもので非常な客観的なもとというのもある。そういう目で見てみると、文系の立場と理系の立場で見えているものがだいぶ異なるなと。そのことを都市科学部にはいってきた人が早いうちになんとかかじりついて、双方の立場を理解していってくれたら、これから都市を双方で作っていく時にほんとうの意味で協力しあって折り合いをつけることができるのだと思います。僕も時間がかかってやっと分かったことなんだけれど (笑)
社会学の先生の言っている空間論がなかなか理解できなかったけれど、自分から見えているって言うことを一生懸命語っているというところがあって、それから情報とネットワークというものもあって、情報系の分野というと情報の先生たちが人の動きをセンシングして都市の色々な発展があるのではないかと考えています。文系の社会学の先生が語るメディア論、これからの情報化していく社会の中で空間がどう変わっていくかということで興味深かったのは、「多孔化する空間」というものです。それは、空間にボコボコ穴が空いていくようなことで、例えば教室でみんなが講義を聞いてリアルな空間で完結しているように思えるけれど、みんなスマホを持っていて外からボコボコ情報が入ってきて、それとやり取りしながら、リアルな空間ともやり取りしているという空間は今までとは全く違うものになっている、という捉え方です。があるなど、僕らは情報技術を扱いながらどういう風にまちづくりができるかを考えているけれど、社会学の人は人の視点と言うか、そこに立った時に空間がどう変わっているかを見ていて、相互に違う視点で見ていくことに意味があると思いました。ほんとうの意味では、一人ひとりがどうしていくかが大切なので、理工系の視点も持ちながら文系のセンスを持って、多くの人に対応した空間づくりに一人ひとりの視点を理解しながら反映するということが重要だと思います。そんな風にこれから都市科学部が、意味を持って行かなければならないし、都市科学部という枠組みがずっと蓄積されていって、何十年くらいのスパンで物事を見れると良いと思います。

寺内：授業を受けている時に教授の方の意図をわかっていないことを知ったと言いますか ...。

阿彦：都市科学部の中で他の分野を学んでいる人の考え方は分野によって考え方が異なるのは当然だと思うので、だからこそ都市科学部の学部の中のそれぞれの分野を専攻しつつ、その考え方を交換していくことができたらいいのかなと思いました。

佐土原：交流しないとそれを感じることができないですよね。知識としてはこの都市科学事典に書いてあったとしてもやっぱり人が触れ合わないと刺激にならないと思うんです。書いてあるのを真剣に読めば、だんだんそれに感化されるとかあるかもしれないけどでも一番大事なのはやっぱりそういう違った考え方を何かこう触れ合ってぶつかり合ってそこは何かわかんないそうっていう風に気づいていくことが大事なんだと思うんですよね。その刺激を感じることができる仕組みにして都市全体をみんなで協力して作り上げる必要がありますよね。まだ座学で止まっているのはよくないなとつくづく思います。

正林：今のお話を聞いて思ったことなのですが、私は南万騎が原周辺の開発のプロジェクトに地域課題実習として関わっていて、今は四学科の人全員が集まっているものなんです。そこには駅と公園の間に商店街があって駅から公園に向けて皆バスを使ってしまうので商店街が廃れていってしまう。そのような状況を踏まえて、その間にある商店街にも魅力があるということを伝えるようなプロジェクトなんです。私たち理系の人達は商店街の全体像をどうしたいかっていうような考えから始まると思うんですけど、例えば都市社会共生学科の人はその商店街の人がどんな風になって欲しいかというような人目線の考え方を主軸としていて、その違いを今佐土原さんのお話を聞いて納得しました。そういう経験ができていたのかなと改めて思いました。

佐土原：僕ら建築から考えていくと商店街をどうするかという考え方で進めようと思うんですけど、商店街の人とかお店の人がどう考えるのかというようなことに興味を持ってる人が他の学科には居ると思いますね。

正林：なので都市科学部 A の授業とは別にそれぞれが地域に入り込んで交流する機会を持つことはとても重要になってくるのではないかなと思いました。ただそれは強制的ではない方がいいとは思いますけど、やる価値はあると思います。

佐土原：文系の人は人の視点で考えるのが主であるということを聞いてもそういう経験がないと分かんないと思うんだよね。建築という分野は両方に近い。人のための空間をつくるというのが仕事だから、文系と理系の接点 となるような立ち位置なんですよね。土木の分野だとどうしても建築とかその産業を支えるとこまでしかいかなくていいんだよね。都市科学部をやってきて全体的なことは理解しやすくなっているし、もし自分が建築を出ていなかったとしたらそういうことはあんまりできていなかったんじゃないかなと思うんですよね。皆さんが建築を学んだという意味を活かせるチャンスがあるといいなと期待しているんですけどね。皆さんはこれから大学院にすすみますかね？都市イノベーションの大学院で都市科学部の学生が学んでいくので、せっかく都市科学部で融合的に分野を超えて学び、そういう素養を持っている人が大学院でいかせるようにしていかないとなと考えて議論してきました。十分それに対応できているか分からないのですけど、学部と大学院の繋がりを持たせることが大事なのではないかという話が出ていて、少しずつ都市イノベーションが都市科学部の影響を受けて変わっていく方向性を目指していきたいと考えています。

阿彦：佐土原先生の研究室は建築だけではなく環境リスク先生方や学生さんがいると思うんですけ、以前と比べて変わったなと思うようになったことってありますか？

佐土原：環境リスクの学生さんが 3 年生からゼミに参加するようになって、環境リスクから来た人は最初は空間に対する捉え方みたいなのか建築の方は事前に演習課題で身についているような気がしますがそこのセンスがちょっと違う。でもだんだん学んでいくうちに習得していくような気がします。空間のイメージを描けないのがちょっと違うかもしれないですね。防災的な観点だったり都市の解決に対して非常に建築に近いことをやっていると思いますね。今の 4 年生は地下から逃げるときの階段の調査や街の中のデッキによる災害への影響などを定量的に検討していますね。私の研究室が建築所属なのでだんだんそういう方向性の影響を受けるんだと思います。ただ都市に対してやっていきましょうという意識は共通してある気がしますね。リスクということに対して環境リスクの学生さんはさらに染み付いているところがあるので、例えば野口先生の授業が他にも沢山あったりするので、かなりリスクについて染みついていますね。そこの観点からも研究が行われていますね。そういった違いは確かにあって気付かされます。

点在する都市科学部施設

阿彦：都市科学部が私達が 1 年のとき（2017 年度）から新しくできて、都市科学部の建物がいろんなところに点在してるというかまとまっていないっていうのが…

佐土原：そうですね（笑）

阿彦：それとも敢えて大学の敷地内で点々としているのか…そこがいいところなのか…（笑）

佐土原：今まで理工学部にあった学科と教育学部にあった学科をあわせて都市科学部を作ったので、結局 " 都市科学部 " として新たに建物をつくるかたちにはならなかったんですね。それで教育学部の 8 号館のところが、年度が変わる中で 4 年間かけて都市科学部のものになっていくところが出来てきて。ともかくあれ古いから最初見た時なんだこれって感じになって（笑）
僕らもそう思ったんですけど（笑）それをこれからまた少し改修していくってことで。あそこがまずは中心になっていくんだなあと。それで今までの建築の研究棟とか、今あるところはもちろん使いながらですけど、一番センター的になるのは、あの 8 号館になっていくのかなあって思っているんです。それであそこ改修して外の庭とつながって一体化して、外の庭を上手く活かしていろんな事やっていこうって動きも学部生の中であるんですよね。あれは環境リスクの人かな？（YUC Yokohama Univer-City かと思われる）が中心になって。建築の人も関わってますよね。104（都市）スタジオの外に張り出して、あそこの庭の手入れをしながら、もっとそういう拠点を増やしていきましょうってやってるんですけど。まあそういう形で、いろんなところに都市科学部が侵食していくみたいな。それでキャンパス全体を都市に見立てるという活動をしている学生のグループがあったりするんですけど。新しい学部ができたから理想としては本当はドーンと建物が出来てほしかったんだけど、なかなかそこはできなかったっていうのは僕らの力の至らなさでもあるんですけど（笑）

一同：（笑）

佐土原：学生のよく行く事務室も最初は本部の横（笑）あそこもちょっと無いよなって思ってたんだけどね（笑）それで今かなりセンターのところに来ましたから、少しずつ改善されてるんですけど。ちょっとみなさんには良い場所を提供できていなかったっていうのは今までの状況かなと思いますね。

阿彦：理工学部の人は「正門側の講義棟に行ったことない」とか、経営とか経済の人は「第 2 食堂とか行ったことない」ということがあるのに対して私達は色んなところへ行くので、大学内を全体的に使えるのは良いのかなと思いました。

佐土原：ある意味、最初は大学としていい形でスタートできなかったんですけど、それを活かしながらもっと自分たちでいい状態をつくっていくということを、藤原先生たちはキャンパスデザインでやってるんですけど、ちょっとこれからまた時間かけて改善はしていきたいと思ってますね（笑）104 スタジオの周辺をこれから更にいい形に改修はしていくかなと思います。ただ建築の人にとってはちょっと離れてるからねえ。

阿彦：建築の人は建築学棟があるので…

佐土原：そうだね。今はちょっと密になるから少しスペース足りないんだけど、学部生は建築学棟の製図室で固まってやれてはいた。そこは 1 つのアイデンティティとしてあると思いますけど、ただ都市科学部の人たちが学部共通の場として交流のための場所とかそういうものが欲しいと思うんですけどね。建築は図書室もあったり、この建物で完結してるところもあるんですけど。「他の学科の人達とこれから交流する場を」って考えたときにバラバラになっちゃってるのはちょっと残念かなっていうのはあるので、8 号館を少しいい形に整備してやっていけたら良いなって思ってます。

イヤーブックの価値

阿彦：あんまり都市科学部と関係ないかもしれないんですけど、都市科学部の教授同士の関わりとかあったりするんですか？

佐土原：先生同士っていうのは…。建築の中はもちろん運営するのに建築の教室会議とかあるんですけど。やっぱり他の学科の先生と一緒になにかやることがすごい重要だなって思いますね。僕自身はさっき言った吉原先生と一緒に 4 年間ずっとこれ（都市科学事典）を編集したこともあって、文化系の人たちと結構一緒だったんですけど。もう少し交流が起こるように仕掛けたほうが良いなって僕は思ってます。都市科学の授業でこれからやれると良いなって思ってるのは、もっと違う学科の先生同士が議論する。議論してるのを聞いて、「あ、これは面白いな」って思ってもらえるようなね。都市科学 A・B・C もそんなふうに出来ないかっていうのはあって、来年度チャレンジしてみようかということも言ってるんですけどね。都市イノベーションの大学院は始まったのが今から 10 年前くらいなんですけど、都市イノベーションの中ではいろんな先生同士を対話の場に引き出して二人で議論するのを結構やって、それを本にまとめたりとかやってたんですけど。ちょっと忙しくしてるうちにある時からやらなくなっちゃって。せっかく同じ大学院とか組織にいるんだから、もっと対話していくような機会が増えて、それが色んな分野を超えて考える機会になって、それをもっと色んな人達に共有していくっていう事ができないかなって思いますけどね。都市イノベーション学府のイヤーブックっていうのがありまして、藤原先生がずっとコーディネートして対談とかインタビューとかやってるんですけど。あれはすごくいいんですよね。イヤーブック毎年度末に一年間こんなことやったという記録と、それから何人かの先生に登場してもらってまとめているんですね。あれは読み物としてもすごくいいですよね。だから、ああいうものもひとつのきっかけで、先生同士が交流するとか、他の先生が何をやっているのか（を知れる）とか。大学院の卒業生みんなに配ったり、他の大学にも配って見てもらっているんです。

正林：以前、真鶴出版に行ったときにこのイヤーブックが置いてあって、そのときに初めて存在を知りました。
佐土原：そうなんですね。これ（イヤーブック）ね、すごいんですよ。文と理が混ざっていて、色々考察するような感じで…。これを毎年やっているんですけど、都市イノベーションの卒業生の会社にお願いしたりして制作しています。
これ（イヤーブック）は都市イノベーションの特色で、もう 10 年くらいずっと続いてているんです。文と理（の垣根）を超えていろんなことを考える、良いものだと思います。

阿彦：これは8年前なので、都市科学部ができるよりもだいぶ前のものですね。学生でこういうものを作ってみても楽しそうですね。

佐土原：そうですね、インタビューしたりしてね。
ただ、もっと、教員も価値を見出してやっていかないといけないよね。都市イノベーションの特色が全部詰まっている本なのに（笑）　これが、教員同士が交流するひとつのツールになっているかな。

対面コミュニケーションの価値

正林：ちなみに来年の都市科学の授業って、オンラインですか？対面ですか？

佐土原：都市科学ABCは人数が多いからどうなるでしょうね。100人くらいまでは対面でやれるように準備は進んでいるんですけれど、200人となると厳しいですかね。部屋がないんですよね。だから、もしかしたら番号で奇数の人と偶数の人とに分けて交互にオンラインでやるかもしれない…。やっぱりオンラインだと、いろんなものが削ぎ落とされちゃっているんじゃないかと思うんですよね。（オンラインでの）コミュニケーションだと、その時は気付かなくても、それが積み上がっていったときに相当失われているものがあるんじゃないかと思います。だから、なるべくいろいろなことは対面でやりたいですね。今日も、オンラインだと話が伝わりにくいかなと思ったものですから、対面でお願いしました。知識だけを説明するのなら（オンラインでも）いいんですけれど、いろんなものを感じてもらうことが授業の大事な部分でもあると思うんですね。そういうのは（オンラインだと）なかなか伝えられないですよね。
みなさんは、卒業研究や設計をオンラインでやってきたんですか？
僕らなんかは（オンライン）授業をやるのに大学に来ていたりしたので、移動はしていたんですけれど、学生のみなさんはずっとこもっている感じになってしまったのでしょうか？

阿彦：はい。春学期は学棟も使えなかったので、本当にずっと家にいて作業をしていました。誰かと対話しないと考えが深まらないこともあると思うので辛かったです。

佐土原：そうですよね。空気を共有しないと深まらないですよね…。
オンラインと対面をうまく使い分けていくのが重要ですよね。対面じゃなくていいものはオンラインでやればいいと思います。対面でコミュニケーションするのをオンラインで補足する感じならいいかもしれないですね。全然会ったことがない人とオンラインで（会話は）弾まないですからね（笑）　4月からは対面にするような準備をしてはいます。まだ予断は許されませんが。

卒業生への言葉

4 年前に都市科学部がスタートしました。実はそれ以前からこんな授業をやって、と構想していたのですが、それがリアルに 4 年前に展開した時の学生が皆さんです。都市科学部っていう新学部が横浜国大に 50 年ぶりに発足して、一期生の皆さんに、横浜国大が準備してきたことを受け止めてもらってスタートしました。準備している段階からどんな人たちが学んでくれるんだろうって思っていたところに、皆さんが入学してくれたっていうのがすごく嬉しかったし、一期生の皆さんがこうやって卒業を迎えるということが本当におめでたいことだなと思っています。今日、直接一期生の人たちの生の声を聞く初めての機会が持てたっていうのは僕にとってすごく嬉しいことです。本当に、皆さん卒業おめでとうございます。

これから皆さんが卒業して社会に出ていろんなことをやっていく中でも都市科学というのはずっと生き続けるものだと期待しているので、今まで培ってきた都市科学の最初の断片的なところを、是非皆さんの中でも一緒になって育てていって、横浜国大の都市科学部、後輩たちみんなも盛り上げていってほしい、そういうことをお願いしたいと思います。ぜひこれからも、都市科学部の中の建築学科の卒業生として活躍を期待していますので、よろしくお願いします。ありがとうございました。

一同：ありがとうございました。

聞き手　阿彦、周、正林、寺内、八木橋